銀鈴第拾號　每月一回二十日發行
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可
明治三十九年二月二十日發行

銀鈴

第拾號

銀鈴第拾號掲載目次

相思（短詩）……高城七星
合同の辭……銀鈴社同人
霜月（短詩）……藏田二葉
寒灰集（俳句）……龜田吟社咏草
花藻玉藻（短詩）……磯守の三耶等
漫語…一…（雜文）……はやぶさ
戰捷の國家（短詩）……多田東岳
春の幕（長詩）……三島溪雲
銀鈴社の詩風を論じて島根詩人に及ぶ……（評論）……立石洲洋
雜詠（俳句）……柄竹等
彩霞（短詩）……牧岡馨子
陽炎（短詩）……濱田支部同人
紅花（短詩）……松江支部同人
漫語…二…（雜文）……啼かぬ鳥
短歌小評（批評）……紅翠等
散紅葉（短詩）……立石洲洋等
漫語…三…（雜文）……啼かぬ鳥
社告……
風光會（俳句）……
微吟（俳句）……新涼會松江支部
寄贈新刊……
廣告……

（禁轉載）

銀鈴

第拾號

明治三十九年二月二十日發行

相思

高城七星

ぐれしい、あの神話が中の花叢か二人に咲けり相思の春に

人もろに死をもいなまぬ荒浪や瞳はもはぬ海人が子なれば

夜の霧は錦のやうにも灯をおほひ船は寢入りし港町かな

帝王の威か春宵のさくら散る男なれどもけふが日死なむ

合同の辭

雜誌『銀鈴』は松江『草笛』同人の勸めに從ひて、同誌とこゝに合同しぬ。固より力うすく勢よわしとは云へゝ、輝ける一道の光り、われ等の行く手にほの見ゆそめたれば、諸子のめゞみとたすけとにいだかれて、やがて雄々しく勇ましきもろ羽の彩うるはしう、生ひ立ちぬべし。

されば我等も、いよゝ道にいそしみはげまむとこそ、ひたぶるに覺悟し侍りぬ。ねがはくば、かすかなれどもわれ等が旨を許させたまひてよ。

銀鈴社同人

霜月

藏田二葉

君見つや見すや雪する冬の日も時じく胸にうつるみかげと

東に我をいたはる人ありと忘れて戀ふる夕もありぬ

胸いたけば昨日とすぎし青春の面かげめきし響さそひぬ

霜月や二人並びて甲板に母を語りぬ渡島訛りと

人一人ゆゑに或日は聖手故に今日は思はぬ世と觀じぬる

山の家に紅友仙の稷しぬと姉にはこりし子を戀ふ日かな

辻町の酢やと石屋の女房同志國の河内を語りて行きぬ

弟と洋琴すなる二の姉に運座も強ひぬ朧夜なれば

たびて皆我に成りぬる力さへ君を忘れぬ日追はぬ世かな

沈たきて戀人まつと我ひねは天を思ふにひまなき世かな

冬晴やひがし隣につとよりて鶯はむる人もきこねぬ

今日はしも聖顔するうき人と晒ひたまふをよろこびぬべき

寒灰集（龜城吟社）

干江選

切干や東寺の塔の見ゆる軒　自來
馬場先西側町や年の市　同
歳毎に來る鴨も來て冬籠　南翠
金燭銀燭あたり眩き火鉢かな　同
下足札火鉢の隅にはさみけり　東岳
鬼窟の入口くらき落葉かな　同
山茶花やあたり閑なる無住寺　嵐泉
洞院の蔀閉ぢたり木の葉散る　同
塵取に三杯運ぶ落葉かな　清江
垢離堂や瀧壺涸れて木の葉散る　同
煤ぬきの佛に一句小春かな　死骨
月落ちて古城の下の大火かな　同
煤掃や濠に沿ひたる干疊　紅山
獸獵の箭を射盡して冬籠　同
仰いて守護札眺む炬燵かな　寺南
若者の戀を語るや番火鉢　同
大根の軒に凍てけり星の數　波舍
玉霰大裡荒れたる鬼冴　同

花藻玉藻

日本海の女王にさゝげまつる

磯守の三郎

魂いづこそは遠のきてみなぞこの知らぬ藻の宮くし媛が胸に

夕づゝや棹さす波にあくがれて雲のあなたに城見しか君

追分と裸形をほこる海男を待つ蜑の女が蘆火焚く宵

藻の花の華鬘にしたるやさ乙女のよさ唄のせて藻苅舟來る

ゆめなりや花藻玉藻がもつれたる潮に透き見ぬ龍女がうなぢ

樂湧きぬ眞珠抱く女が波の穗の鬣に捲かれて舞ふ夕かな

銀蓮に鷗舞ふなり混沌の匂ふを君と丘に居て見る

春潮の海松の林に尾鰭ふりむつがたりす

る小さき鯛かな

森脇桃村

砂濱や網すく蜑のかたはらに大錨あり小蟹匍ひ出ぬ

磯の夕玉よする音と欸乃のひびきて胸によき譜かなづる

帆のかげと鷗と蒼き海を見て藻汐やく子の幸たゝへけり

拾ひたる色よき貝に耳あてゝたのしき海の詩をきくかも

美しき罔象の姫の夢趁ひて白き藻がくれ白鳥の泣く

松本掬雨

玉舟に棹して二人夕ぐれを七彩うつる潮あぐるらむ

松かげや濱の祠にたゝうみて鰯ひく女のうたきゝたまへ

薄月は島にかくれて夜の潮に白裳の神の琴の音ぞする

後藤孤星

帆へぬべきけはひに似たり大海の眞晝現ずる怪形の雲の

潮鳴はうみ鱗族の軍勢が今しぞよめくかちぞきと見る

千鳥なく潮の遠音にひかれ來てそぞろ磯回をめぐる月の夜

貝やぐら沖の青海にわれ築きて金龍に乗る姫をむかへむ

『潮浴みて藻の花かざす海姫』と眞球とる子があらはをほこる

漫語一

○俳句をや出してから小説や新体詩が面白くないやうになつた――簡潔と冗長――僕等は火山國民だ。（はやぶさ）

戰捷の國家

多田東岳

幾萬の犧牲の力や何になりしこの太刀はやも飽けの戰

戰は捷ちぬ祖國はかたまりぬ歌讃ずるになどたじろかる

たじろかる小ひさひゞきの我が歌も國うたはむに樂そろひきぬ

そろひきぬ扶桑固より靈の國彼さげしめば精いや疑りぬ

いや疑りぬ鐵百錬の堅き國さらでも久しこゝ自我の聲

自我の聲さば膝つきて戰ひて我に宿りの賊懲しめむ

懲しめむ靈の戰士の人たりとかくてはかなる人敬まはむ

春の幕

三島溪雲

蛇の目傘春の雪

群におくるゝ一人こそ

京の紅屋のこの娘

花子十八薄化粧。

紅の繪扇さとひらき

片笑み姿いぢらしう

ものに目盗れて佇めば

またおくるゝと叱られぬ。

銀鈴の詩風を論じて
島根詩人に及ぶ

立石洲洋

吾人は、銀鈴の詩風乃ち新涼會詩風が、島根詩壇に於ける鎮として、頗る異彩を放つあるは、強ち我田引水の謬見にもあらざるべしと信ず。吾人は翠瀲氏及び銀鈴社同人詩氏の勞を多謝す。何者諸氏は眞に全力を茲にそゝぎて後進を誘掖し、よく其指導を誤るなければなり。茲に於てか吾人は追號隆盛の域に進む銀鈴の將來を謳歌し、極力そが發達を祝福すべければなり。

金泥に高山かざる初日の出こぼれ櫻の彩
しぬ水も　（翠瀲氏）

そが着想の美取材の妙修辞の優麗なる所は、たしかに銀鈴詩風を代表せるものにあらずや。殊に「こぼれ櫻の彩しぬ」に至りては凡々詩人のうかがふ能はざる境にもあるかな。

里は老いよ山は古びよ三冬の安き睡も我に適へば　（朝風氏）

大海や朝莊嚴の響きして樂鳴り出でぬれ
ほん光に　（桂水氏）

流石に熟練の詩也。前者は悲觀的材景を捉へて樂觀的詩美に化したる、作者獨得の技倆。若しそれ後者に至つては、森嚴壯嵩なる「朝莊嚴の響き」等賛嘆の辞に苦む。

晝と夜　（寓星氏）

知名大家の作、敢て駄評を加へざるも奇拔幽玄百誦して尚ほあかざる心地す。

秋五句　（千江氏）

中にも「月出でゝ」「洛に來て」「小狐の」句誦すべし。「高札を」「藥さして」の二句いたく其陳なるを慨む。

巖頭微吟　（碧雲氏）

殊に後聯の五句を愛す。

曉衣氏のたはむれの作又ゆかし。

櫻翠氏の「やはらかう」「稚文字や」「こよひよた」等優麗清怨凡そ（たゞよ）その詩人企及し得ざる所なるべし。其他笑風氏の「いもうとに」「笛の音や」如

舟氏の「涙もて」「行く秋を」「里わたり」東岳氏の「山なれば」「夕陽は」「堀川や」水聲氏の「木枯や」「木屋町や」枯荻氏の「馬の上に」七星氏の「すめる夜の」「沈み行く」「ちひさなる」信子氏の「秋の堂」素陽氏の「夕ちどり」翹白氏の「矢を負ひて」「奈良すぎて」「旅そゝろ」雲溪氏の「山の宿」明星氏の「世に泣かる」「夢にして」等秀中の白眉なるべく、感踊に堪へたり。

吾人は島根詩界の明星を以て河野翠瀲氏を目す。而して氏の眞摯、熱誠、艶麗なる詩は廣く渴仰する詩人の師表とするところ、吾人は謹で氏の永久の健在を祈るものなり。青戸白虹氏、與原碧雲氏共に我が詩壇の爲めに盡されたる既往に於ける大なる勞に對てしは亦先輩を以て推すに吝ならざるもの、其他七星、桂氏、笑風、紫星、如舟、東岳、紫雲、醉芳、葉櫻、明星、翹白、蜂秋、瀲雲、水聲、二葉、天籟、朝風の諸氏島根詩人の優なるものか、なかに葉櫻氏の詩は、むしろ散文に近しと雖も、詩に向つて忠實なる点は慥に賞讃の値あるを斷言するに於て躊躇せず、嗚呼濟々の多士や、請ふ幸に健在なれ。

雜詠

冬籠　獨り案ずる碁の手哉　桔竹
水仙の雫畫絹にこぼれけり　洲洋
北山の雪南山の眠りかな
銀瓶の水寒菊にそゝぎけり
勅ありて畫く名馬や御代の春　松灣
沐雪やぬかづく禰宜が折烏帽子
數入の日暮れて家にかへり鳬
梅百木百木の梅白き
臘夜を女と乘りぬ伏見船
春の水梅の林へ流れけり
砂白く水碧にして梅奇なり
山に添ふ茶の木畑や梅二本
戀餅や桃咲く村の婆が店
畑打の成るべき草もなりけり

彩霞

牧岡馨子

舞姫の息吹か紅屋の屋上にかぎろひ立ち
ぬ京の春の日

春の海彩の布帛の透きかげに藏人侍る水
神の裳かな

漕ぎ出づる水棹の雫手にうけて海の紺青
を色疑ふや

舞衣の傘して過ぎし餘香と見ませ雪に咲
くなる白梅のはな

頸まく御手と白百合わなゝけりいぶき薫
ずるシユレムの花野

馬槽にふします聖子の相形と牡丹は咲け
り賤が垣根に

うつゝなく御遊に待り天人の舞樂見るご
と御手しぬ今宵

冬の夜やひとり燃ねぬるこのれもひ吹雪
と舞ひて星と凍てまし

とはに祕めん外の丹塗の玉手箱あけてか
ひなき御胸と知れば

柏木や葉守りの神の白綾の被衣を思ひぬ
雪のふる日に

梅の香や包ひ小袖のほころびてもどきわ
づらふ春の七人

われのごと薄き被衣の天乙女人まつらし
のねばろ月かな

陽炎

（濱田支部同人）

松本掬雨

梅の戸に天童彫ると鑿とりぬ伶人千たり
靄にまかれて

森脇桃村

白馬に千たりの猛者が鞭あて〻水晶殿に
馳すと雪降る

瑠璃盤に玉をまろばす音としもみ空にう
なる凧かな

黄鳥に文箱まゐらせ思ふこと鸚鵡に告げ
む春雨の窓

君よぶにかすむ遠山こだましぬ京へ一里
の桃木立かな

後藤孤星

樺の木に赫日さしぬ五万年太古のまゝの
青葉をもれて

西の國の大寺九月の施餓鬼會や乞食等群
す太鼓うちつゝ

山の日や麓宜も交りて在はすべし紅葉焚
いては酒くむ三人

増野翅白

貝摺の文箱結びし桃、肩に、かつぎの女
房いづちへまゐる

そのみ袖かくれて笑まむ日もあれや破羽
ゆだぬる蝶のさまして

み瞳は金の燭とる星の子のくしき冠りの
玉とし見ゆる

かげろふや鳥羽繪に似たる京の街塔たつ
あたり金泥にして

鶯のさゝなく里の椿の戸うたにやさしき
み兄をおもへ（翠激兄を訪づれて）

次號原稿〆切二月廿八日

紅花

（同松江支部人）

高城七星

あけぼの〻霧むらさきに河姫が劇をそのまゝ年立ちにけり

野津さくら

平和の歌聲ながら響しぬ玉の宮居のあけぼの〻空

三島溪雲

笛とれば紅植かつ散るうす月に灯ともしのみなゆらぐ宵

久保田双蝶

あら海や白鳥むる〻岩の上自由うらやむ曙にして

薫ずるは清き思ひのさゝやきか梅にも似たるけだかさよ君（洲洋兄に）

中津峰秋

嚴の神の諚とぬかづきぬ骨に泌み入る三冬の風

狂はしき胸のほむらの消よかしと吹雪野走せぬ何物も見で

福間如舟

やせたりなはたちひさなり臓なり詩の野をゆく影になかるゝ

きゐのこる御堂のともし風すると小袖かざして泣きぬ冬の夜

坂本笑風

榮ゆる日を君が笑ひとかしこみぬとはの生命はこの日より得し

雪の夜やしづかに寢ぬる小雀の明日しのばれぬ吾にも似ると

立石洲洋

短歌小評

第九號

▲櫻翠氏の短歌は中央詩壇に於て既に定評あり、いづれをろれと美はしからざるにあらねども、わきて『戀すれば』『山棲や』『こよひまた』『あなさびし』『切に思ふ』をいと美くしと感じ候。金矢の中には東吾氏の『山一つ』よろしく、七星氏の三首は皆艶麗さすがは京風俗をまのあたり見つゝある人よとうなづかれ候。水聲君の進境驚くべし、中にも『東ゆ』『船頭の』『木枯や』は最もうれしく候。のぶ子女史の御作はみな美くしく候へ共小生の嗜好より申候へば前號の『袖几帳』の如きを擇び候。七ツの灯中には翅白氏の客觀詩群を拔けるものか其他雲溪氏の『さゐぎぬや』孤星氏の『繪行燈や』等はよきみ詩なりと存候。翠瀧氏紫雲氏等のお作見ねぬは物足らぬ心地いたし候。（紅翠）

▲萬里樣櫻翠樣の長短詩錦上花をそゆるとでも申しませうか。碧雲樣久し振にて眞摯な御調拜しました。枯荻さまのこれまた久しぶりにて滿足いたしました。『水の里』『七つの灯』いづれもめで度、

鷺の遠はのきさて湖の南を行くに醉はれぬるかな

さかしらの世にもあるかな、兩極の氷ひろごり天地を蔽へ

漫語 二

○獨り俳句の上に現はれたる修辞の變遷と言はず元治慶應の頃より此の方四十年餘の間事物の變遷に伴ひ辞の遷り變はりも隨分多い樣だ今思ひ出した二三の例に見るも禁庭樣＝主上、天朝＝政府、役人＝官吏、下もゝ＝人民、掟＝法律、年貢＝租税、公事＝訴訟、隠密＝探偵、差紙＝召喚狀、寄合＝集會、異人＝外國人、師匠＝教師、召捕＝捕縛等其他數へ來らば尚多からう。（啼かぬからす）

△次號發行三月二十日▽

就中素陽さまの『夕ちどり』『孤星さまの『川べりに』翅白さまの『矢を負ひて』『奈良すぎて』『藝術や』『國たから』『たゝねよる』『おばしまに』『うるはしき』紅翠樣『おばろ夜や』『魔が刷毛に』『火の室と』『藝術や』『雲溪樣『きぬぎぬや』『山のやど』洲洋樣『地なる戀』『戀華樣『うたもなき』殊に晩花さまの『みいくさに』は我が昔の思ひに比べて、同情の念に堪ねません。翠瀲樣桂水樣れ二人とも短詩の少かりしは、聊さか飽かぬ心地が致しました。朝風樣の初めて拜見、あんなお手並がれ在りなさるのに上手な鷹とて滅多に爪をれ見せなさらんのを惜みます。（やよひ子）

漫語三

○出し抜けに俳句は何ういふものかと譯なく問ふ人には故子規子の言を以て答へてやる曰く先づ郊外に出てげん〳〵蒲公英の花でも見給へそれで分らずば木の芽をふかんとする林のけしき熟々と見給へ若し其時仰向いた顔へ鳶が糞を落したら俳句はこゝなりと知り給へ。（啼かぬからす）

散紅葉

立田洲洋

わが窓に來てなにごとかさゝやきて過ぐるがごとき夜の嵐かな

花折りし詩心ありやをとうとの母こまらする物の言ひぶり

うたはむに興もわきこぬこもりねや夕づく日にはわれと泣かるゝ

水仙に霜ばれ寒き竹の椽しはぶきしつゝ君訪ひましぬ

菅笠に意宇山くれて町へ入る湖畔を二里の夕月夜かな

散紅葉さびしき中にみめぐみを讃ふるごとき杉のひとむら

響なう魔が手のごとも冷やかに夕潮われにひたよすと見ぬ

夕づく日こもりぬ出づる頃はひを花のあかきがしぼみて落ちぬ

菅原紅雨

紅の雨する中を七人の女いそぎぬ白百合に似る

春風の髪に袂に夕月夜二人へ吹きぬ紅梅の花

古川溪雲

月夜町名妓ひさぎく踊すと人はつゞひぬ京屋がまへに

しめり來る樓のつゞみや春雨は柳に降りぬ灯の紅き街

雨あがり踏むはゆかしき若草途おぼろの月に君待ちいでぬ

上羽綠葉

鬼草よ刺ある草と人は避けぬ薊と生ひしさだめ泣かるゝ

やくがごと熟き情よ、あやしまる書きます筆のよく燒けざりし

立田紅翠

きぬぎぬや戸に入りがてのおん君がみ髪にかざす紅桃の花

樺多き林を思ひ人おもひ都なじまぬ蝦夷の君かな

呪咀とやそれ甘んせむ稚草にまろびて寢ねむやさし羊と

合宿や北國人が熊狩の話よ、置きし酒冷ゐにけり

ふる里よ春よ牧場よ若駒を魔が率て行くと夢見て泣きぬ

藤本晩花

母病むと雪する道を年若の使を具して夕急ぎぬ

雪ふれば大地闇なる色に入り明日なき樣の日と知られける

内田枯竹

地のけがれいとひて霧は天に去ぬあこがれ人よ涙しぬゞへ
何者か胸にこもりぬ冥想れば嘲あらむ世とかへり見よ

福間如舟

しつらひて草の笛手に野に立てば雲垂り山の精降り立ちぬ
五千丈（世もやけうせよ）うつゝ見る紅蓮の床にわれも身なげぬ

松園閑人

紅梅やよしあるさまの門搆へ名刺ちひさし女文字して
我爲といふにはあらぬ文使も春の夜なればなつかしきかな
灯のゆらぐに雛風召すと袖もて掩ふ三の君かな

大屋左一

波の穂のそのまゝ凍りぬ白珊瑚とこしへかざる身と生れなば
遠江杉の大樹の下蔭を禰宜の供して君とゆくかな

社告

本誌創刊以來、筆を編輯の上に執りて力を致されたる佐々木朝風君は、轉勤のため、本社々員を辞せられたり。吾人は、深く同君の隱れたる功績を思ふとともに、將來社友として贊助せらるゝの約あるを謝せずんばあらず。而して、新に社内に入り、我等同人と協力して、文藝の清娛を分ち、雜誌編輯の任を執らるゝ菅原紅雨君は、年少能詩の士、よく諸君の望に愜ふべきを信ず。我等希くは一段の奮勵を加へむ耳。

銀鈴社同人

風光會

出雲木次

草花五句集（第十四回九月課題）出句者十七名欠選者二名總句集八十五句の内八句互選結果十二点螢雪、九点松聲、秋江、神櫻、葉村、松露、羅月、七点緣葉、雷鳴、幽山、杜月、映紫樓以下略

六点　野社の華表朽ちけり草の花　杜月
五点　落魄の賢女が庵や草の花　螢雪
同　曾つて見ぬ草花咲くや巫女が庭　秋江
同　凹凸の石のぐるりや草の花　映紫樓
同　草の花野路の佛に手向け鳧　翠峰城
同　草花の黄に紫に秋はるゝ　雷鳴
四点　水害の跡たがやさず草の花　緣葉
同　埋もるゝ古磚の當りや草の花　幽山
同　大原やつゞく日和に草の花　松露
同　草花に脚胖の埃はたきけり　葉村
同　草花や鬼門に當る五歩の庭　神櫻
同　制札も垣も朽ちけり草の花　螢雪
三点　御陵の垣のまはりや草の花　櫻月
同　花咲ぬ名なし千草や已が秋　神櫻
同　面白の草花二三繪師が庭　葉村
同　草花の小道も行けば牧場哉　松聲
同　閉却す兒守車や草の花　羅月
同　打つれて草の花摘む唱歌哉　同

微吟

新涼會松江支部

一月廿一日、雪降る日なり、集るもの笑風。如舟。波秋。笨堂。紫汀。洲洋の六名。峰秋、さくら、紫星、溪雲、天泉、陶水、柳村、笛杖、鏡月等の詩人は遂に此清莚に來り加はらざりき。霜の花、蒲團、炭賣、柊の四題を探つて運座を試み、終つて俳句相撲等催し歡を盡して午后十時頃散會しぬ。（洲洋生）

二人行く湖畔を風の寒さかな　波秋
柊の株に蘭など植ゑにけり　紫汀
外樣に狐の糞や雪の寺　峰秋
塞聲や謠稽古の戻り道　稻玉
頭巾着て戀女房に笑はれな　天泉
咲くや水仙垣根に薄日を浴びし

炭賣の女が曳きし小馬かな　如舟

晴れ待ちて干さる蒲團や鳥の糞　笑風

美しき女炭賣る寺の門　笑堂

冬ざれや灯もるる裏の町　陶水

三徑や枯れし葎に霜の花　洲洋

炭賣や嵯峨に見知れる梅の主

水仙や筧を餘るこぼれ水

風となり雨となり遂に霙かな

寒垢離や鞍馬の僧の連たちて

縱に横に畔差參たる冬田哉

柊や大門の内物靜か

座蒲團に劍容談ず夜寒哉

山茶花の花にうれしき小窓哉

○社友動靜　多田東岳氏は舊臘濱田に於て、美くしき君を迎へ給ひ、伉儷いと睦じき由なり。杉浦朝武氏は、目下在京、某新聞社に在りて彩筆を揮はれつゝあり。

▲寄贈新刊

□友ちとり（第二）　鳥取翠松會
所論概ね陳腐。詩歌亦幼稚なり。

□若　櫻（二ノ一）　千葉文學會
内容外形とも今一層の改善を望む。

□五　月（三ノ一）　名古屋五月舍
所載の俳句なかゝめでたし。

□少年團（三ノ一）　岡山奥田金正堂
少年少女の好伴侶たるを失はず。

□野　守（第三）　京都此樂社
片々たる少雜誌、發行日なほ淺く、刷新の餘地少からず。

□しぶき（一ノ七）　愛媛シブキ會
俳句小品文等やゝ整へるものゝ如し。

□憧　景（第三）　米子あこがれ社
編輯の技未だ甚だ拙なきを覺ゆ。吾人は亦内容の精選に一段の力を致さんことを望む。

□若　草（二ノ一）　大東若草會
豐富なる材料と、躰裁の優美なるを愛す。前田林外の長詩「無情」を載せたり。

□小　琴（第八）　尾道小琴社
記事躰裁まれに見る地方雜誌也。尾上柴舟、花房柳外、阪井久良岐、田岡嶺雲、大石霽山、本山萩舟、入澤涼月等の稿を載す。

◉廣　告

懸葵

毎月一回
一日發行

●懸葵は京都に於て發刊せらるゝ日本派俳句雜誌なり

●來る三月一日第三卷第一號を發刊す此際購讀を始むるの好時期なり

第二卷第十二號（二月一日發行）

要　目

○俳諧のデカダント（四明）○獅子窟句屑（句佛）○初旅吟（玉城）○寺社めぐり（樂堂）○鎌倉江の嶋雜詠（一樹）○三浦城趾（すみ子）○俳句寫生行（夜濤）○募集文章、兄弟○募集句、頭巾（鳴雪選）風呂吹（稻青選）○冬の蜂（菰堂選）○蕪村忌○會報○雜吟（四明選）○消息

▼定價　一部金八錢六部前金四拾五錢十二部金九拾錢▲

京都市松原通岩上西入北門前町　懸葵發行所

詞友諸君、筆硯愈々御多祥に被爲渉賀上候。扨て小生事近時殊の外俗務に趁はれ御音信も相怠り居候て、失禮のみ打重ね候段御容赦被下度、本誌本號の編輯も主として桂水、紅雨の二君を煩はしたるが如き次第に有之、幾重にも御寛恕の程希望に不堪候。何れ來月に入り候はゞ、少閑相生じ可申、ろの節緩々お伺ひ可致候。紙上にて右れ斷り申上候。　敬具

二月二十日　河野翠瀲

明三十九年二月十七日印刷
同　年二月二十日發行

（定價　一部五錢郵税五厘
同前金六部郵税共參拾錢）

島根縣邑智郡田所村大字下田所七百三十二番地
編輯兼發行人　河野岩雄

島根縣飯石郡赤名村大字赤名八百三番地
印刷人　木村柳三郎

同縣同郡同村大字同八百廿一番地
印刷所　赤名活版所

島根縣邑智郡田所村
發行所　銀鈴社

△廣告料一行貳拾錢、半頁貳圓▽

銀鈴第拾號　每月一回二十日發行
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可
明治三十九年二月二十日發行